アタゴオルは猫の森

ますむら・ひろし

ATAGOUL is Cat's Forest

1



MFコミックス
フラッパーシリーズ

アタゴオルは猫の森
1
ますむら・ひろし

MEDIA FACTORY

9784889917659
1929979005146
ISBN4-88991-765-9
C9979 ¥514E
定価：本体514円（税別）
雑誌52640-65
メディアファクトリー
MEDIA FACTORY



立って歩き喋る猫たちとニンゲン、
その他諸々の
ヘンなもんたちが共存する
不思議の国アタゴオル。
中でも大食らいで、
傍若無人、
無邪気だけど
ずるくていやしいヒデヨシは、
いつも騒動のタネ！
ギルバルス対冬の魔物、
寒怒呂の戦いにヒデヨシが乱入する
『冬をこの手に』他、6話と、
書き下ろしあとがき
『アタゴオル余波』を収録。



ますむら・ひろし

昭和27年生まれ
山形県出身。
昭和48年デビュー作「霧にむせぶ夜」が
「週刊少年ジャンプ」に掲載。
その後青林堂に入り
雑誌「ガロ」を舞台に活躍、独立後現在に至る。
平成9年には「アタゴオル玉手箱」で
日本漫画家協会賞大賞受賞。
宮沢賢治作品の漫画化にも意欲的に取り組み、
独自の感性で大胆に視覚化している。
中でも「銀河鉄道の夜」は
昭和60年、劇場アニメとして公開、
マンガファンだけでなく
宮沢賢治愛好家の間でも高い評価を得ている。

装画・ますむら・ひろし
装幀・多田和博＋岡田ひとみ
フォーマットデザイン・フィールドワーク

ATAGOUL is Cat's Forest

アタゴオルは猫の森 ◇1◇

ますむら・ひろし

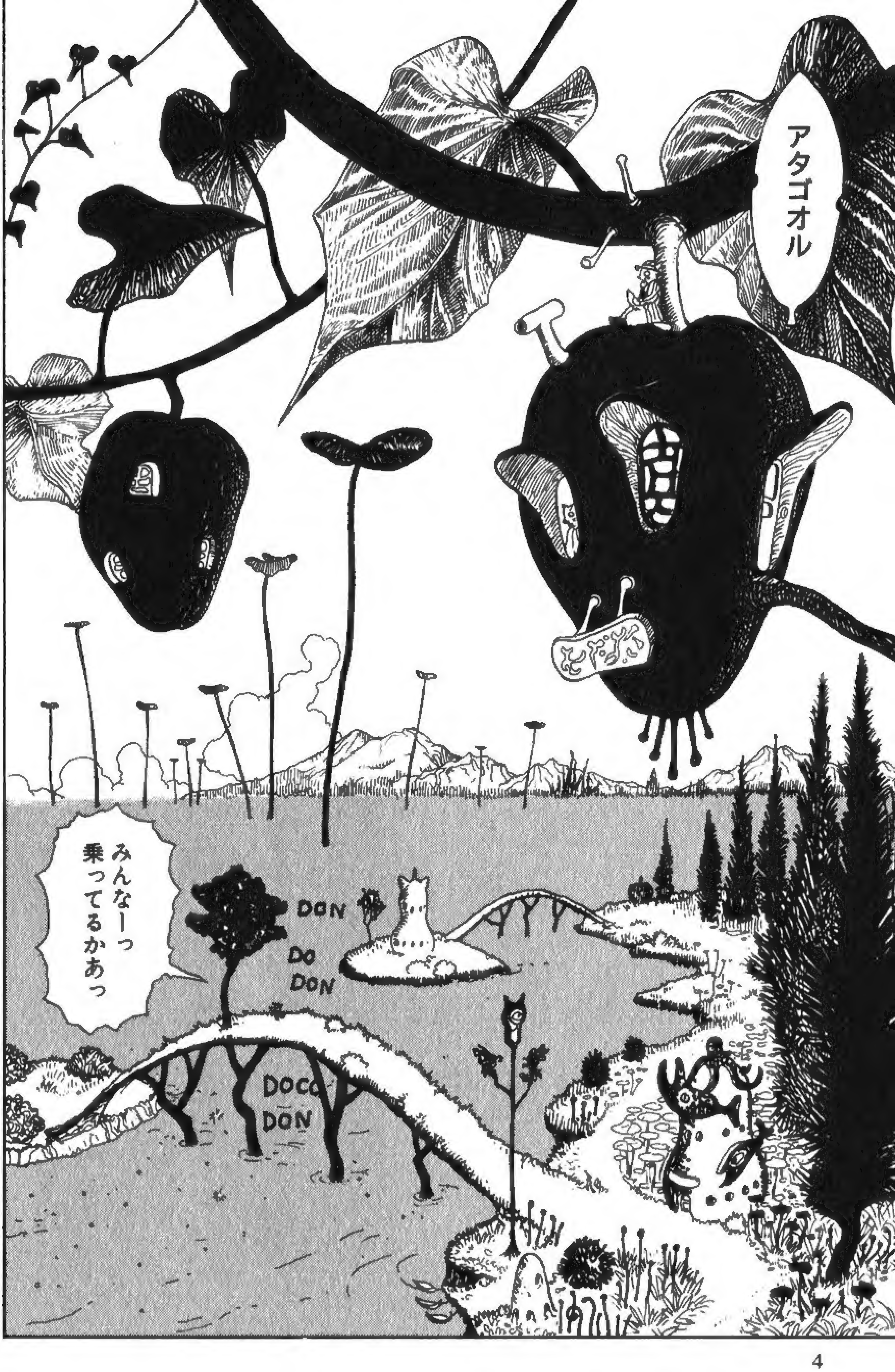


アタゴオルは猫の森 ◇1◇

ATAGOUL is Cat's Forest

第1話 月ヲ祭ル




アタゴオル
みんなーっ乗ってるかあっ
DON
DO DON
DOCO DON



乗ってるぜ〜〜っ
いくら乗ってもよお…
最後に浮かぶのは
オレのだけなのさーっ
おーーい
んっ
テンプラーッ お前のでかくなったなーっ
ちょっと聞かせてよーーっ
いいよ


おおっ
シブイ
地味な音だべよ〜〜〜っ
ねえねえ オレの音聞いてよ
遠慮するよ
まっ
そ――言わず
わっ
これか？


でっけ——べ
でかいけど……この月腐ってる
腐ってないわよ
腐りかけているけどさ
いいか
オレの月の音聞いてくれよ
しーーん
歌わないぞ
ふふふ
折檻じゃ
プルプル


ガウ
ガウ
ゴガ
雑音だ
ゴガタ
やかましいぞ コラーッ
粉雪亭
唐あげ丸様!
わーーっ
らっ
何だ アイツらーっ
親方の音楽を 好きな者たちだよ


凄い気迫だなあ……
おっ 鳴月草が歌うぞ
まるで雷のような
ホホ やるでねーか
ダメだああ こんなんじゃあ
親方ーっ


うう
何がたりないんだあ
「蛇腹沼流し」が近づいてアセってるのです
去年だってあんなに立派な月……沈んだもんなあ
「本物が育てた鳴月だけが決して沈まない」
そんなもん迷信だぜ
去年お前の月浮き草たっぷりまいて浮かべただろう
ところが
ドップリコと沈んでしまったぁ


普通なら
沈まないのに
……
何かの力が
働いているんだよ
フッ 今年は
も〜〜っと
浮き草を
つけてやるぜ
何かが
たりないんだ
あんなに大切に
水をやり
育てたのにーっ
うっ
おっ誰だ
アイツ？
ギルパルス
だよ



お前三日も会わないと忘れるんだなあ
借金もな
ギルバルスも粉霜亭においでーっ
あら……知らんぷりしてますよ
アイツはコーヒー飲むお金が無いのさ———っ
無銭飲食男がよく言うねえ
無敵暴食だぜい
唐あげ丸さんの三日月はすばらしい…
だが……ひとつたりない
何がたりないのですか？
ツキミ姫か
気づいていないのだ
森の民すべてが「月祭り」の意味を…
祭るべき月を……



祭るべき月……！
……唐あげ丸さんを救うことはできませんか
苦しんでいる姿を見るのがせつないのです
自ら気づくしかない
自らで助かるしかないのだよ
ところで姫に見せたいものがある
何ですかコレ？
やはり姫には見えるか…
得体の知れない代物さ
だがオレにはどうも



邪悪な予感がする
こらヒデヨシ えーかげんに帰れ〜〜〜っ
山賊洞
う〜〜〜っ
粉雪亭は寝静まってるべな……
唐あげ親父のブドウ酒蔵でも襲っていくかーっつ
ら
ギルバルスのやつ
唐あげ親父の三日月に……



何撒いてんだ？
ねえギルバルス
何撒いてんのさ――っ
うっ
とんでもない奴に……
栄養なんだろ
それ――っ
3日後
来ました
ついに来てしまったのです
親父――っ
行くぞお
キエ〜〜〜ッ
始まりますっ




しかし「祭るべき月に気づいていない」ってどういうことなんだろう
大空の三日月様以外に——っ
何を祭れって言うんですかあ
月なんていーの
乗れればいー—のよお
月送曲第八番
お待ちかねーっ
磨あげさ——ん
今年こそ
沈みませんよ——に
よ〜〜〜っ
沈没諸君
よーしオレはここにするぞーっ
げっ
逃げんべ


ああ
あれっ あれっ
鳴月の音が……
やけに……
ほほう
さすが唐あげ丸……音色が変わった
あちこちで月送曲は演奏され
いつしかみんな合奏に入っていく時
ひとり合わせない奴
桃色三日月ー?
笑うのでぇ
イエイエッ
祭るべき月って何なんだ……?


あの月でも……
んっ
鳴月の音が
妙に染みてくる
！
……まさか
この鳴月でもないのか……？
おーーっ 月が沈むぞーーっ
らっ
ザボ
よーーし
行くぞ オレの月
果てしなく
浮かびまくるのじゃーーっ
浮き草つけるの忘れっちゃ〜〜っ


まるで
月の子供みたいだ
あっ
チャプン
残念でしたな
沈没パンツ君
あっ
また
沈んだっ
くーっ何でお前の
腐った月 浮いてんだ?
浮いてます
ホウホウ
私のォ
三日月ちゃん
あ〜〜っ
ドンドン
沈んでくよっ
残ってるのは
もう……
ギルバルスの奴
テンプラのにも
粉ぶっかけたな


かけたからといって
必ず浮くわけじゃないぜ
おっ
月に
吸い寄せ
られていくぞ
あらまっ
んっ
あっ
ひいっ
これは!!
げげっ


月光ギターがぁ
月送曲を


わあっ
光の
音符が
おっ
何だ
足にっ
ヤローッ
靴を盗む気
だな～～っ
うっ
うわっ
キャ～～～ッ


きっ？
やっ
やや……やっぱり
祭るべき月って
コレだったのですね
きえ〜〜〜〜っ
……嘆きや悲しみの海に
ポツンと輝きながら
僕らはもともと
月と暮らしていたんだ……
三日月に始まり
やがて満月に至る月が


みんなの胸の中に
住んでいる

第2話 雪歩の引き出し




大晦日
居ませんなあ……
行きつけの店にも姿を見せないし……
ドン
ドン
幻覚酒屋さんお宅のツケはいくらですか
言いたくありませんよ情けなくて……
キッチリ取り立てましょうなっ
おうツケ踏み倒し断固阻止するぞ
がんばりましょう!!
がんばんなくていいよ


かわいそうな
ヒデヨシ君
家にも
帰れない
冷えるなあ
まったく
ですなあ
あんまり
寒いんで
豆蔵の中の
引き出し
開かないいん
ですよ
引き出し
かあ……
そんな
季節だな
「雪歩(12月)の
引き出し」か
雪歩の
引き出し!?
なんですか
それ?
ホラ


ゆっ
雪の引き出し……!?
実にいっ
美的であります
「アタゴオル七十七不思議」のひとつなんです
霜歩月になるとこの辺に現れ雪根盛月(1月)の中頃に消えるんだ
なんにも入ってないね


この引き出し
ぶっこわしてもさ——っ
おっ逃亡猫ヒデヨシ
ホーラ
ああ
元にもどっていく!!
なっ
しつっこいのよ〜〜っ借金取りと同じなのよーっ
借金取りは当然だけどこれは不思議だよ
探したぜヒデヨシッ
ゲッ しつこい奴らめっ





※そつけな／アタゴオル語で「そんな」と軽蔑する時に使う


ひぃ——っ
柄満堂様
どうりで
賞金ウニ
2箱な
わけだ
年の瀬に
こりゃあ
見物だなあ
おい
コラ
ひさしぶりだな
バカ時計
柄満堂


ぐるった
おばえを
にゃごひげ
やうえ——っ
ヨダレが
出すぎて
何言ってんのか
わからんな
柄満堂なんて
大バカ時計ですよ
もう8時すぎなのに
まーだ4時だもん
ヒデ丸
静かに
うっ
はっ
このあたりの
木々は
時計に!?
ええっ柄満堂の僕に
なっているんです
冬の寒さが
ひどくなると
一段と凶暴に
なるんで……
直ひげ
やうえーっ


正確に
1秒1打だぞ
ドド
ごう
まかひろ
凄い響きだねえ
ズッシーンと
くるよ
この重い響きが
くるった時計に
効くんです
ドド
おっ
ドーンドド


ぐわっ
あっ ヒデヨシ君
むがが ウニ箱
ああっ しめつけられても リズムがくるわない
がんばれ ヒデヨシ君
問題は ここから なんだ
う
なっ
なまっ


生イカ大王
じゃねえかっ
てめ〜〜っ
よくもこの[redacted]はーっ
あっリズムが
くるったっ
ヒデヨシ それは
幻覚だっ
しっかりしろ
ウニ箱が
待ってるぞ
おっ
ウニ箱
ウニ箱
じゅうる
じゅる


ウニ箱ウニ箱
じゅーるじゅる
偉いぞ
食いたい一心で幻覚に勝ってる
ガンバレ ヒデヨシ君
キャーーッ
ズボッ
ぐぞっ
柄満堂の野郎ーーっ
ヒジリヤマ こんな時計ブッこわそうぜ
らっ



ザザ
ゲッ
この時計は いにしえの天才ピスロピセが作った貴重なものなんだ
壊すなんてとんでもない
ピスロピセかあ
植物学 鉱物学にも精通した時計職……
そんなこと言ったって
いくら叩いてもどーにもなんねえぜ
そうでもないぞ
ホラ 時刻が相当近くなっている
ウニすすりの時刻も近づいたわけだ
やるべし やるべし
ウニ箱 ウニ箱
じゅうる じゅる
ドド
ベロなんかにゃも〜〜う


まかれないわよ〜〜っ
いたぞーーっ
ヒデヨシ借金払えーーっ
ゲッ
おおペロちゃんこっちよこっちっ
ふう
助かった
ヒデヨシッ酒代払えーっ晦日だぞっ
来年になっても取り立てるぞっ
くっそう
あっ
ズシンと響く

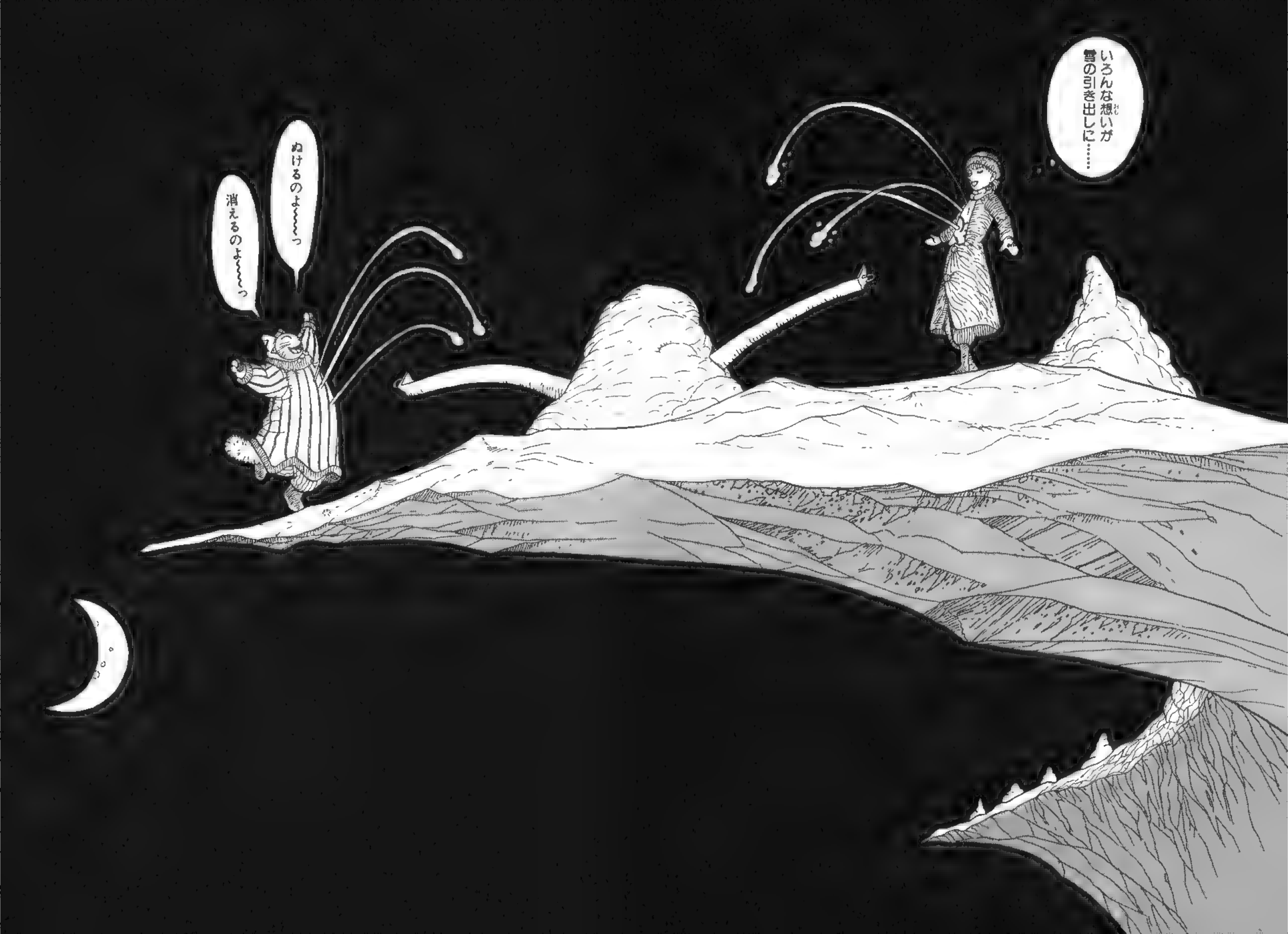

取り立てに追いつめられて
腹のすわった音が出はじめたんです
ほほほ
金返せっ
それ 金返せっ
イカン 妙にノってるぞ
しかし 凄い男だなあ
1秒1打の間隔はピッタリのままあのノリが出せるんだから
おおっ
時計の瞳が合ってきたぞっ
あれ


こんなところに雪の引き出しが
えっ？
ドーン
変だな
さっきまで無かったぜ
いいぞヒデヨシ
もう少しだ
あっ
なんだこれは!?


雪の引き出しが次々と……
どーいうことなんですかあ
何かの祟りじゃないんですか
柄満堂の時刻が正しい時刻に近づいてきたことと関係あるんじゃないかな
オレもそう思う
時計が正しくなった時雪歩月の引き出しの謎が解けるかもしれない
きえ〜〜〜っ
ヒデヨシ君——っ直せよおおおっ


あと5秒
ずれてる
だけだぞっ
引き出し
どこじゃ
ねーんだ
新年まで
2分を切ったぞ
金返せ
踏み倒し野郎
くどーい
おおっ
合った
ピッタリに
なったぞっ
ミッ
ミ
キャーーーッ
降ろさないでえ
来るぞ
とっ捕まえろっ


うっ
引き出しがのびるっ
あっ
ななっ
なんですか
アンタ
引き出しの
ぶんざいでっ
ゲッ
こっ……
これって!!
ああ……
胸の奥の


いろんな想いが
雪の引き出しに……
ぬけるのよ〜〜〜っ
消えるのよ〜〜〜っ


にがい想いも
楽しい時も
心の奥の傷も
借金請求の
意欲も
すべてぬけて
ああ
まっさらに
なっていく……
そして雪の引き出しが
雪に沈んだ時
僕らの中に
妙なものが
浮かんできた
うわっ
それは
瞳だった


これで何が見えるんだああ
もうすぐ新年です
こら柄満堂ベロで運べいっ
3…2…1
ミッ ミッ
新年明けましてーーっ
オミャロロロ
ああ……オレたちはこの瞳もともと持ってたんだな
うん
胸の中がまっさらになった時見えてくる……
クウッ見えますっ見えますっ
あたり一面


希望で輝いてるっ

第3話 冬をこの手に 前編




ツメ
ゴーッ
見事!!
氷の冷たさが
ズンとくる旋律だ
ほほほっ
も〜〜すぐなんです
夢の共演があっ
天才バイオリン弾きの
ゲバラセ翁から
手紙が届くなんて
光栄の極みです
しかし 極寒の
パラモラ山脈で
演るとはねぇ
おーーい
ドン
ドドン



ゴオオ
ごめんください
誰かいませんかー
ドン
ドン
おーーい
中から
気配がするのに
出てこないぜ
おっ
おおおっ
凍ってる!!
ゲパラセ様
なんてこと…
どうして
こんなことに!?
「寒怒呂(かんどろ)」に
やられたんじゃ


寒怒呂?
口無山に住んでいて冬になると現れるヤツなんじゃ
ワシらは冬中 貢ぎ物を差し出し家の中でジッと耐えているんす
ゲパラセさんはワシらの止めるのも聞かず……外でバイオリンを弾いて 寒怒呂の怒りにふれたのす
春になって氷が解ければ生きかえるんじゃが
バイオリンの能力は寒怒呂に吸われて無くなるのじゃ
そんなあ
アタゴオルとやらにはとても強い方がいると風のうわさに…確か
ギルバルスですね


ええ!!
その方のお力を借りることはできないでしょうか
できますとも――っ
寒怒臣を成敗してもらいます
バッ
ホントですか
来てくれるかどうかはわかりませんが葉脈通信で連絡をとれば……
そして突然
アタゴオルの森の空に緑色の文字が浮かび
んっ
「ギルバルスに告ぐ
至急バラモラにて
助け求む……
貴方の唐あげ丸」
それから3日後
笛の音が聞こえる
来たっ
おおっ
貴方が伝説のギルバルス


いかにも
ギル様と呼んでネ
おまえ
ヒイッ
おまえ？
ピロロロッ
うっ
ニャア
おまえって…この方は？



見てのとおりのギルバルス
助けて下さいっギル様
まっかせなさーーい
しっかし効くなあ
アタゴオル博物館の地下室から盗んだこの笛はよォ
ホレホレ
ギルバルス!!凛凛しいお姿で
催眠笛だ
よーーし パンツいいぞ
それで お願いってのは なんなのさ?
冬になると私らを苦しめる寒怒呂を倒してほしいのです
ギル様相場として……
蹴り1発ウドン1杯である


へっ?
まっ500発くらい蹴ったり切ったりするからサ
前倒しでウドン30杯食すぞい
なんだかギルバルスって…
英雄の実体はこんなもんかも知れないぞ
んめえ
冷やがけ最高〜〜〜っ
ギルバルス様中で食べて下さいっ
ごうふへは(どうしてさ)
外にいる者は襲われるんです
おえあぼべばぶぶ(オレはギルバルス)
ぶべきあほはあ(無敵なのさーっ)


ぶっ
なんだあ コイツはあ
そいつが 寒怒呂 ですじゃ
ほう コイツか
よろしい バケモノ
ギルバルス様の 大ワザを 見せてやろうぜ
何やってんだ ギル様……


ガランゴラン
うまいでしょーっ
見るからに……馬鹿顔……
フッ
500発かけて成敗してやるぜい
眠れっ
がっ…
うっ
うわ
やられた


あっけない
ギルバルスって
こんなに
弱いのか
ギルバルスが
やられた…んっ
あれ……
オレは
今まで
んっ
ヒデヨシが
凍ってるっ
えっ ヒデヨシ?
なんなんです
このヒデヨシって
見ての
とおりの
デタラメな
奴です
眼帯に
カツラまで
用意して
村の民よ
なぜ
こんな馬鹿を
連れて来た?
ゆっ
許して下さい


こつけな奴に
あやまることねぇ〜〜〜べよっ
えっ
オオッ
氷が解けてるぞ
信じられない
あの氷が解けるなんて…
頭の中にチクンと来たけどサ
軽いもんだぜ
こんな気味の悪い奴は
処分する


ぐっ
ドッ
ヒデヨシ
ちゃあんと
血は出るな
わあふあっ
んっ
うっ


ギルバルス
寒般呂
とやら……
催眠笛が
効くような
意識は
あるんだな


おお ギルバルス
わおっ ヒデヨシ君
うっ
あれっ あんな所に
こらぁ バケモノ
オレが こやつの兄の ヒデバルスだぜ
ギルバルスか 面白い
少しは骨が ありそうだな
パンツーーーッ テンプラ 起こして くれえ
うるさい なあ
そこで 寝てろよ
寒怒呂
なぜ この地の者を 苦しめる


弱いからだ
弱いことは罪なのだ
ほう……すると おまえもオレから見れば
十分 罪深いぜ
眠れ
へっ
重いい
キャーッ
かっこいい
んっ
おお
らっ
ホント


フハハッ
!
……なるほど
くうっ
シウーーッ
う
凄い熱だ
ス


たっぷり温まりな
！
こんな熱で
ワシが解けると
思うのか
パキパキ
うあ



喉の骨から潰してやる
！
ああ ギルバルスが
いやーーっ
あやまるのよっ あやまって許してもらえ
許さん
ズグ


いやったーーっ
ギルバルス様
最高ーーっ
おおっアゴ!!
アゴの氷を
そうだっ
アゴの氷?
ふう
ありがとう
ギルバルス
私がアタゴオルに
送った葉脈通信
見てくれたんですね
いや……
それは知らぬ

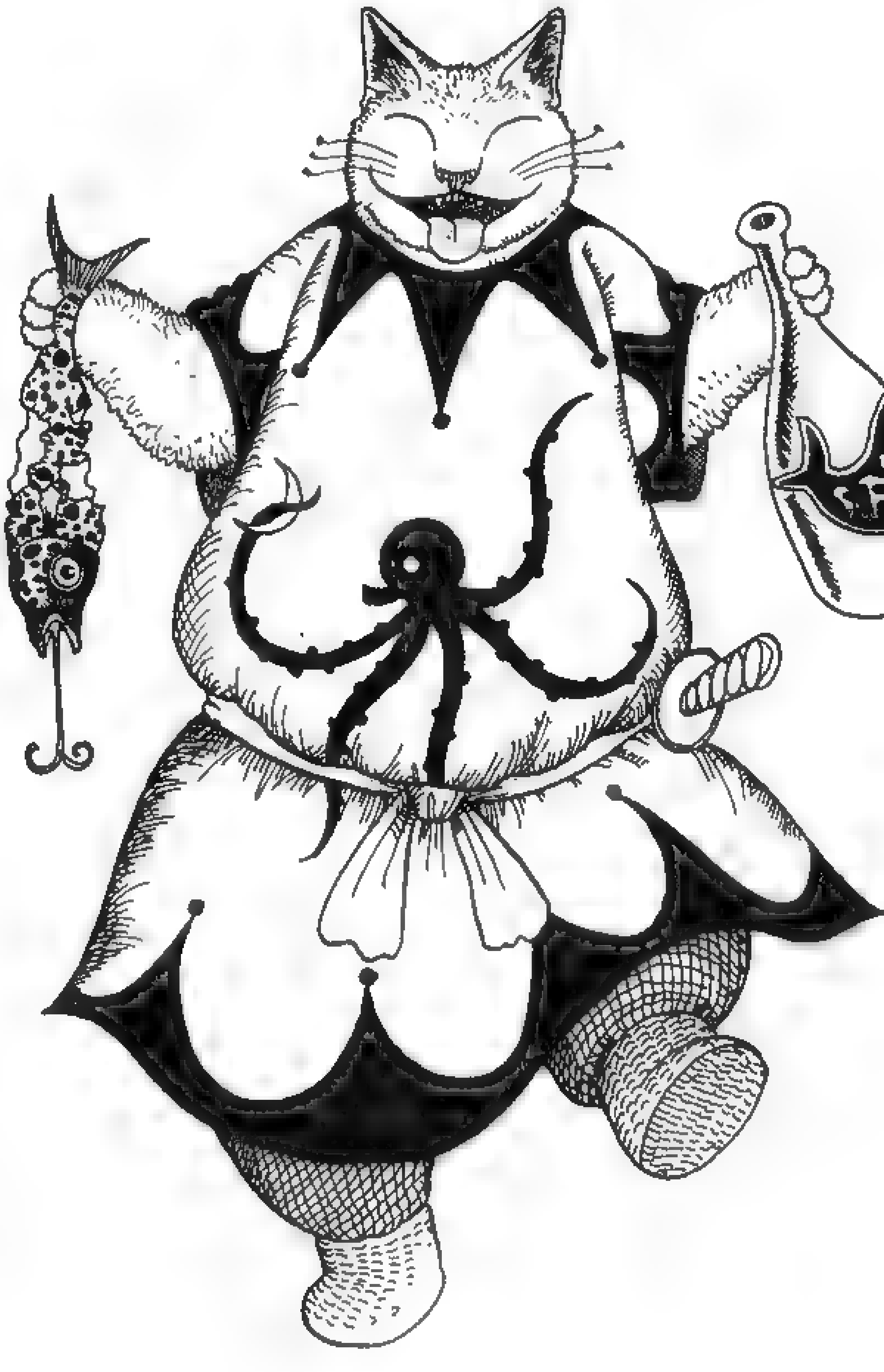

おーーっ
ヒゲヨシ君
しぶとい氷めっ
自力でプチ割ったぜ
私は依頼されていたんだ
へっ?
でも素鑑呂が倒れたのに
ゲバラセ鴉の氷
解けませんねえ
ん
おお……
素晴らしい……
なんて新鮮な旋律!!
誰だろう
この笛……




氷の
ギルバルスだっ
ずいぶん似せたもんだな
笛の腕は
誉めてやろう
笛の能力は
ゲバラセ翁の
ものさ
なにっ
うっ
わあ
これは…!
お前
オレの能力を…


ああ……素怒呂が
ギルバルスになるんだよ

第3話 冬をこの手に 後編





なに〜〜っ
寒般呂がギルバルスになるだと〜〜っ
ひぃ
そしたらオレは
寒般呂の兄バルスなのじゃ
まっどっちが勝ってもお兄様
寒般呂が勝ってもいーんですかっ
わかるだろうお前なら
これがなにか
！
みんな早くオレから離れろっ
えっ


キャア
う
ドダダダ
チッ
ほほう
その暑苦しい槍で
オレを解かそうって訳か
オレの術をマネたところで
オレにはなれないぜ
残った方が
ギルバルスさ


いいだろう
あ〜〜っ 始まったあ
くーっ いそげっ いそぐのよーっ
ヒデヨシ なにやってんだ?
心の準備よ
来怨臣が 勝ったらサーッ
お寒い奴


ムッ
なんのマネだ
!
お前……
いかにも
左利き



兄者……
やったあ
あらーっ
ふう
うっ
ギルバルス



うっ
熱なんかじゃオレは解けやしないのさ
あ〜〜っ ギル様がやられたっ
ダメか…… 破壊しても元にもどるとは……
見てのとおり
これからはオレ様がギルバルスだ
ははあ


そしてオレがお前の兄バルス
ぐっ
ひえ～～～っ
なんてことをっ
きっ
貴様ーっ
キャーーッ
今のでウドン10杯よっ
くっ
バカが…
見るからにいやしそうな奴だな


ハッ
来怒呂様を倒す褒美としてウドン500杯を要求しております
なるほど……
木刀でオレを倒そうなどと話にならん
それにしても
ギルバルスは大した奴よのう
これだけ氷の矢を浴びながら
頭部だけは屈していない
村の者に命ずる
すべての食料をここへ集めよっ
えっ
来怒呂の奴……なにを？



よいか
この食料には私の力が働いている
ひとつでも誰かが食べればギルバルスの頭に氷がつきささるぞ
むっ
えっ
なんと!!
むごい
ギルバルスの命がかかってる食いものを
オレが食うと思うのかあ
絶対食う
しかし妙ですなあ
ギルバルスは誰に依頼されて来たのでしょう


ひょっとしてゲパラセ翔じゃないのかな
えっ
翔が？でも どうして
寒貂呂に凍らされるのはわかっていた……
というか……あえて凍らされようとしたのでは…？
ひえっななっなぜなんですかっ
それがわからないんです
ところで気になるのは
アゴの氷ってなんなのですか？
寒貂呂のアゴの氷には
不思議なものが入っているという言い伝えがあるのじゃ
ですから私としてはあの氷をぜひ


ヒデヨシ君に差し上げたいのです
私もそう願います
ええ?
ほつほつ
催眠笛
やっぱり来たな…いやしい奴め
いえ〜〜〜っ
オレはヒデヨシなのすあ〜っ
うっ なんだ お前
うへへ うまそーな 食いものだな
ホレ


ぐしっ
どもね
うっ
なにコレ？
お前ヒデヨシ
オレはテンプラ
そして
腹へったテンプラは
コラッ
やめろ
ガッ
キャーーッ
んめええ
うわっ
食ったっ
なんて奴だ



ズ
ぐっ
ホラ
頭部に
やめろヒデヨシ
恥を知れっ
ガッガ
恥なんか食ったって
んまくねぇわよ
こりゃ
んめ～～～
う
ボトッ


お前は
まったく大した奴だぜ
おや
ギル様
パキ
パキ
にゃ
なにすんの
さ〜〜〜っ
魚一匹
食った
くらいでよぉ
寒慇呂
本当の
とどめを
刺してやるぜ
ほう
どんな熱でも
解けないオレに
パキ


とどめだと
キャーーーッ
キャーーッ
降ろすのよ〜っ
ギルバルス
うっ
なんだ……
ギルバルスの手の上で



ふくらんでいるものは…？
イヤーッ
そんなちっぽけな玉で なにをする気だっ
いくぞ寒怒呂
！
しっかし なんでオレはおぶられてんだ
へっ
悲しいのう こんな玉が… お前の力とは…
ポ
にっ

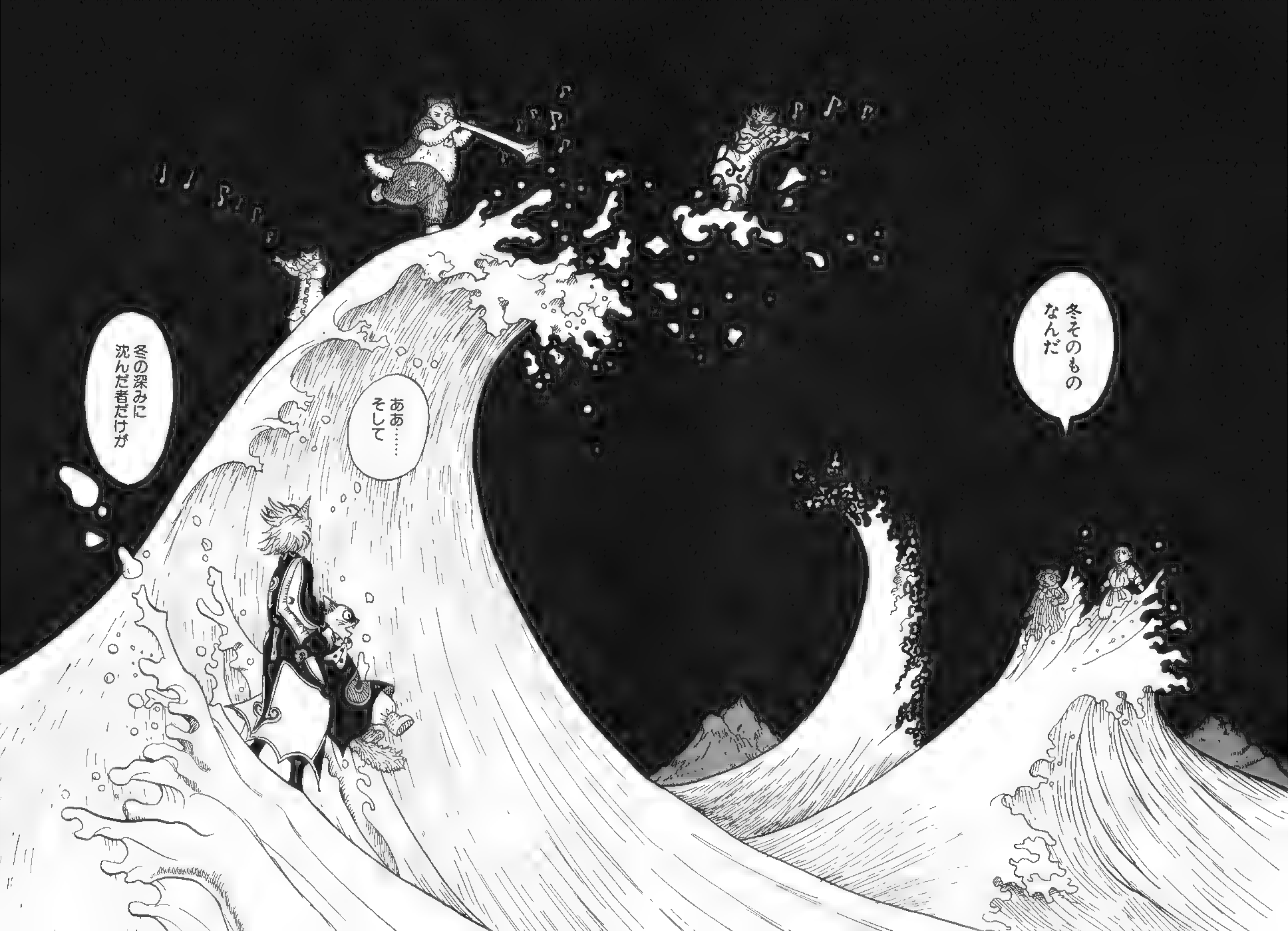


う
キャーッ
キャーッ
キャーッ
イヤーッ
ら
キャーッ
うわっ
解けたっ
解けだしたぞ
あれっ
この声は!!
凍りつくオレの意識に
響いてきたのは
ヒデヨシの
声だった
「んめ〜〜〜」か
その声は
どんなに冷たいものにも
たどりつくんだ


癇にさわる奴だと思っていたがデブ猫……
大した奴だ…
アゴの氷はお前に…やろう…
うわあ解けた
やったっ
しっかし
こんな氷よお
かじったってうまくもないぜ
なに言ってんですかアンタッ
おお解けたっ
翁 私が唐あげ丸です
唐あげ君か会いたかったぞ
…そーですかっ やっぱり翁がギルバルスに依頼して!!
でも なぜ凍ったり?


「冬の旋律」を知りたかったんじゃ
寒怒呂に凍らせられた者が聞くという……
冬の旋律!!
それで聞こえたんですか
かすかに…
だが複雑で思い出せない…
うっ…
こっこれだ
うわっ
穴吹いたら勝手に音が出るのよ〜〜っ
おおっ吹いてくれたまえっさあ唐あげ君も


凄い旋律だ
うっ
これは!!
いかにも
ただの旋律
じゃない
にゃっほっ
ああ
この旋律こそ


冬そのものなんだ
ああ……そして
冬の深みに沈んだ者だけが


微笑の熱さに気づくんだ

第4話 キホ





親父
ブツは来たのかい
ああ
ホラッ 持ってけっ
その服も オレの金で 買ったんだろ
そーよ
また やろうね ネズミ・トランプ



やるわけ ないだろう イカサマ男
あーら そんなこと言うと ここで吸っちゃおう かなーっ
吸うわけねえべよ 大事なオレの技
ひっ
それは やめでくれっ
まったく……バカに 凶器渡しちまった……
なにが凶器なんだい？
「半月ブカン」 3つね
よう パンツ
ヒデヨシに…… カナブン島産の 禁断のブツを 渡しちまったのよ
ええっ
海賊でも にげるというアレをか


ネズミ・トランプで大負けしてこの店取られそうになったんだっ
あいつのイカサマは巧みだからなあどうも分かんない
分かんないと言えば
こんなに毎日暖かいのに今年はなぜか
「葉吹き」がおそいよなあ
オレも変に思って
植物見張り塔の地下へ行ってみたんだよ
ええっ
あんな気味の悪い所へよく行くなあ……
それでなにか分かったのかい
いや……ただ
たくさんの水晶のうち 1つだけ赤く輝いてた
そりゃあどういうことなんだい？
見張り塔のワクにおさまらない植物がどこかに生えているんだ
ヒデヨシみたいな奴だな
ああなんて


いい匂い
わおっ
これが「滝梅」ですか
ええっ ちょっと甘みが ホラ
おおっ
くっ くさいっ
なにこれっ
悪臭
あ


ハーイ
おまえ
なに吸ってんだ？
カナブン島
禁断のブツ
クサヤ葉巻
「大腹ワタ80号」
…ああ…
ほっほっほっ
ツキミ姫脱落
実はオレも
少し苦しい
ちょっと涙目
早く
消せっ



サラバ
か弱き鼻ちゃん
ううっ
死ぬかと思った……
なにやってんだアイツ
アアッ鼻が変です
変と言えば……今年は
葉吹きが妙におそいですよね
そうかっ
どうも憂うつだと思ってたら
春なのに緑が吹き出さないからなんです
そう言えばそうですね
いつもならもうパーッと緑の点々が森中に起こってるのに
あのね……


開こうとしているのに
なにかに押さえられている
ような気配がするよ
えっ
少しずつ中で
腐り始めてるぞ
そんなっ
げげっ
原因は
いったい？
それが分からないんだ
このままじゃ 森中の
植物がダメになるな
遠ざかれ
この野郎っ
近づくんじゃ
ねー―っ


万引きしようったって
ホラ見ろ
みんな鎖が
かかってんだぜ
で？
うあ
くさい
ひいいいっ
助けてえ
ほほほ
魚屋は
オレの海ーっ
好き好き
葉巻ちゃーん
2日後
腐ったっていーべよ


一年間 葉っぱなんか
なくたって
オレは平気よぉ
おまえが
平気でも
森の植物は
死んでしまうよ
どえらいことに
なったなあ
憂うつが
頭の中で
餅のように
ふくらんでます
そう言えば
ヒデヨシ 今日
星森ウドン屋で
葉巻吸ったろ
ほほ
一服吸って
タダ食いよ
ヒデヨシは
貴方かね
へっ
クサヤ葉巻を
平気で吸える
貴方に頼みがある
はあ?
のへへっ


ホントにすさまじい臭い
シビれる臭い〜〜〜っ
あのオッさんの話だと「去年の夏に森に雷が落ち」
「封印岩が一つ吹き飛んだ」ってことだが……
そーいえばこの奥に黄色くて変な形の岩あったぜ
おまえ こんな所へも来てるのか
ああ頭がズキズキする……
オレはもう限界かな
臭いがドンドン強くなるわよっ
あっ



これは?
封印岩が粉々だ
これ……伝説の植物「キホ」だよ
キホ!?
植物見張り塔の水晶が赤くなっていたわけは…コレだよ
そうか これが塔の能力のおよばない植物…



そして紅マグロ2匹でブチのめされるのさーっ
待てヒデヨシ
「キホ」は貴重な謎の植物なんだ
伝説の中にはこうある
「キホを切り倒しても臭いは強くなるばかりで森には住めなくなった」
それじゃ臭い止まんねえのかよ〜〜〜っ
いいか……
「ヨネザアド植物学会最大指定植物33番「キホ」この植物を発見 または キホという意味を解明した者には学会団子と名誉賞をさずける」
それじゃあ……「キホ」の意味を解いたらスミレ博士はクビになった学会に復帰できるぞ
なんとっ


解いちゃる
ずえ〜〜ったいに
いちゃるぞおお
あ〜〜あ
あんな所に
登って……
「キホ」とはなにかっ
ふぅー
激臭の
花弁の中で
クサヤ吸う……
恐ろしい
生き物だ
伝説ではな
「鼻の強い男 現れて
一夜にして悪臭を消す」
とあるんだよ
えっ
鼻の強い男って……
ヒデヨシみたいな奴が？
2日後
「キホ」とは


「気保」
どんなに臭くても「気持ちをしっかり保つ」ということじゃないでしょうか
その説…… 買いましょう
なにが「キホ」だ
葉っぱちゃんを救わなくっちゃ
…考えたんだけどさ「臭の強い男が一夜にして」だから
今夜は あの花びらの中で 一晩 すごして みてくれないか
えっ
ホッ そんなの 楽勝じゃよ
おおっ ワシの寝床は 花びらよ〜〜〜っ
♪♪♪
らっ
なんだソレ?

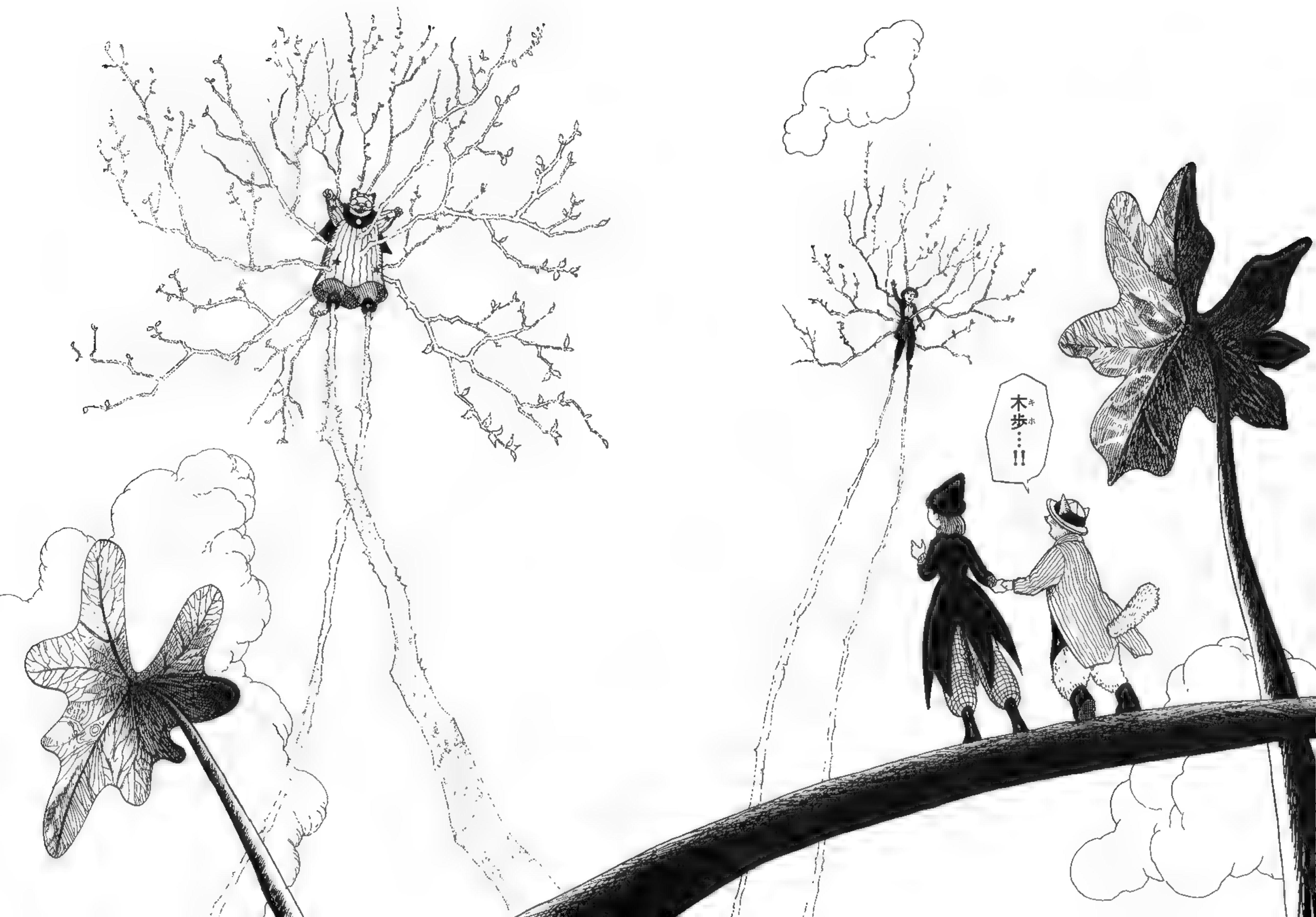

オレたち 卵テントの中で寝るから
おまえもがんばれよう
おう まかせなさい
フーム
師匠が体張っとるのに弟子どもが卵テントとは
学問の酢ダコ神がお怒りの墨を吹くわい
チッ
チッ
んっ……
うわっ
ぐ～～


なんでこんな所にいるんだっ
ホホ……
眠り花粉をぶっかけて連れて来たのじゃ
あれっ
なんじゃ
臭いが消えてる
お〜い パンツ起きろ
悪臭が消えてるぞ
こりゃどーいうこと?
オレたち……こんな所に寝て脱臭剤みたいになったのかなあ
ホントだ臭いが消えた
ウヘヘ これで紅マグロ2匹じゃ
わっ
ド
ズル
テンプラ


んっ
あれ？
浮かんでる
親方ーーっ 眠りましょう
眠れませんっっ
親方 もう3日も寝てないんでしょう
体がもちませんよ
葉っぱたちの悲鳴が耳にこだまして眠れません
おーい みんな
あら パンツ君



ヒデヨシとテンプラがキホの花びらの上で一晩寝たんだ
えっ
そしたら臭いが消えてホラ
ホーッホッホッ
みなの衆
ワシャあ鳥じゃ
スミレ鳥なのよう
うっ
浮かんでる
パンツ君
私の手のひらに
手を乗せて……
浮かんでるんじゃない
えっ？
あっ
「キホ」って


木歩（キホ）…!!



木の形をしたものが歩いてくるんだ
でもなんなんだろうアレ!?
んーっ分からないな
うっ
カサ
カサ
うわあ
葉吹きだあっ


なんだか
ワシのうしろで
どんどん葉吹きが
起こるのじゃよっ
わっ
！
ん？
おっ
ああ
なんて
気持ちのいい
ツキミ姫
これは
いったい？
今


春が入って来たのよ

第5話 夕暮れの切手




アタゴオル郵便局
君ねえ なんべん来ても
そんなもの うちじゃ 作ったこと ないんだよ
「アタゴオル」って 書いてあるんだべ
かくすな 親父
どうしたん だい？
おおっ地元民 見てくれろ
あっ
切手だね


あれっ これ
なんで作られているんだ？
フフッ
水だよ
えっ
水製の切手
オレの家に
昔から
あったものでよ
アタゴオル製だっつう話なのだ
……それで この
使用済みのじゃなく……
ああ
未使用の奴を
探しに来たのだな
しかし
水製切手なんて
聞いたことないよなあ
うん でもこの切手から
かすかに音が聞こえる
えっ
なんの音が？
瀑布の音だ


鳥霧山・滝ノ森
そーーかっ 変な音は これだったのか
いらっしゃい よーこそ 滝ノ森へ
「流し ソーメン」 食ってケロい
大盛りたのむっ



来ないねえ
おっさーん
早く流せよ!!
ちょっとーっ
コッチもぜんぜん
流れてこないぞお
おっかしいなあ
また
狸の野郎かな
狸
多そう
だもんな
うっ
ポン
ボゴン
出たな
大狸
あっ
ヒデヨシだ
ヒデヨシつうのか
狸の塊は


かっこいいなあ アイツ
ええ
おーい テンプラッ
流しソーメンは盗み食いすっと2倍うまいわよっ
だまれ コノヤロ
おっさん ホラ
あいつのタダ食いの分だ
へっ？
アンタ これ 黄金じゃねえか
んめ〜〜〜っ アリガトオッ
やっぱり ゆっくり食うと んまいなあ
君 名前 なんていうの？
ナッパ だよ
切手探しに 来たんだ
水で 作った 切手か？


えっ
おまえ
どうして
それを!?
知りたきゃ
滝に打たれなさい
ザーーッ
あれっ
あそこにいるの……
切手屋さん
じゃないか
そーなの
よお
この辺で
滝に打たれて
いる奴
みーんな切手バカ
切手収集家が
滝に打たれて……
なんのため!?
欲望とは
恐ろしい
ものよ



切手一枚のために〜っ
滝に打たれてご苦労さん
ボコ
ボン
また来たな
アッチへ行けよ
おんやあ
こんな所に水製切手が
わっ
おまえ
ううっ どうしてコレを
凄い本物だっ
らっ
おお
でも 本物は透明で見えないはずだろ
銀雲母の箱に入ってるから見えるんだ
透明な切手!!
おう テンプラ ひさしぶりだな
いかにも これが伝説の「透明な切手」だよ


これ
ゆずってくれ
金貨2枚で
オレは
金貨3枚だ
なにーっ
金貨1枚で
紅マグロが何匹も
何匹も何匹もっ
ナッパ
売ってくれえい
紅マグロが
待ってるぜい
うっ
金貨なんて
いらないよ
オレがほしいのは
未使用の切手さ
・・・ミショーって
いくら
するの?
金貨
10枚以上
探す
絶対
探すう
ザーッ



邪念の塊だなあ
ああ
ヨダレが滝のように流れてる
ここの滝に打たれ
なにも考えないでいると
やがて切手が見えるようになるという話なんだ
「なにも考えない」っての
ヒデヨシの得意技なんだけどなあ
おーーし
見えた
ええっ
見えただとっ!!
おう
青壺じじいを感動させてやるぜい
青壺?



青森ーっ
見たのよーっ
やれるのよーっ
ドドドドド
また
来た
くどい奴よのう
今度こそ
歩いてみせるぜい
歩く？
この液体の上を
沈まずに
歩けた時が
切手の見える時
なんだよ
ここを!?
行くわよう
パチャ
あっ
すおっと



おおっ
コヤツ
そんなあ
こんな
いい加減な
奴がっ
切手が
入れば
紅マグロの
山よぉ
ド
ら
パ
邪念が
浮かんだな
くっすぉ
もー少し
だったのに
よぉ〜〜っ
ビダ
ビダ
ヒデヨシ
がんばって
切手見えるように
なってくれい
そしたら
オレがその切手
買うから
いーわよ


不思議な気配のする液体だなあ
オレは歩けるだろうか
わっ
ザ
ウッ
いやしいぞテンプラ
紅マグロのこと思ったなあ
切手とは想いを伝えるもの
透明な切手を見るのは
透明な想いを持つ者のみじゃ
透明な想い……


ようは なーーんも 考えないのよ ね〜〜〜っ
全然違う!!
どうしてコイツ 歩[redacted]かけたりするんだ……
2日後
ら
急に 頭の中で
マグロが踊るのよーっ
もうっ
紅マグロのことは 考えるなって 言ってんだろっ
少しはテンプラを 見習えよっ
うーっ
スキだらけ だわ
つき落として みっか


ホレホレ落としちゃうわよ〜〜〜っ
あらら カンペキに真剣
こいつ
そんなに紅マグロ食いたいのか
水は落ちるのに
見ていると昇っていくようだ
!
そうか
そうなんだ……
オレたちは宇宙に


湧き出した の一
流れ続ける水の粒……
よし!!
オレもなっ
おお



凄いぞ
すばらしい
あれっヒデヨシの奴
半分沈みながら
ねばってますヨ
紅マグロを
考えても
沈まなくなったんだ
じぇ〜〜ったい
ばくばく
紅マグロ
いやしさも
あそこまでいくと
悲しい感動が
あるのう


どーだ
ホラ 歩いたわよ
ジャブジャブ
ジャブジャブ
よろしい
ふたりとも合格だ
切手とは
想いを伝えるもの
ポーン
んっ
プクプク
なんだ
コリャあ


ザー
ジャボ
ジャボ
うーっ
切手なんか見えねーぞなあっ
ああ
でも一足ごとに
そう
気分が上がって
すんごく
気持ちいいのよォ
う
ここって


滝のピアノ……
ドドド
ドドド


わお
足で弾くのかっ
ホレホレ
なんだコレ音しねえぞ
ら
ああ
ヒデヨシの切手だ
最高の〜〜〜オ


もっと上〜〜っ
翌日の夕方
イエ〜〜〜ッ
見つけたわよォ
おっ
こっちも発見
あれっ
さわるとズンと来るな
うっ
なんてことだ!!
夕暮れが胸にしみるのは
このせいだったのか……
……でも


誰からの通信
なんだろう

第6話 みすたあ・ぽすとまん




ボン
うるさいな～～
あいつさっきから
あんな所で腹づつみ……
ボン
やかましいぞ
いーかげんに
しろっ
しーーん
あれ
うっ
ハグハグ
どろぼう
ドッ


んめえよお
ポ
ポン
おっ
張ってきた
団子で
腹の皮が
ふくらんで
いい音だが
まだまだ
よのう
ポン
ポン
ペン
ペン
ペコ
らっ
まだ
コイツラカ
君たち
静かにしてネ


いい腹音
出すためには
あそこの魚をな
あっ
貴様
ワハハハハハ
ドス
ドス
フッフッ
フッフッ
ロウで作った魚
持っていったぞ
少しはコリたべ
……あんまり
味しねえな
この魚
アララ
でっかい



でかしたぞ
子狸君
んめえ――っ
うっ
あら
イエ――ッ
なにやってんの
さ――っ
あれっ
子狸
おーーい
にげなくていいんだよ
タタタタ
最近
オレについて
来るんだ


そんな 着ぐるみ 着てるから だよ
ヒゲ岩なんか なでて どーしたの?
調べてるのさ
★そつけなもん タダの石だべよ
これは なにか 呪術的な 気配がする んだ
それになぜ 「ヒゲ岩」と呼ばれて いるのか 判らない
さわるとヒゲ とれるんじゃないの
しかし 局長
コン コン
しきたりとは 恐ろしいもん ですなあ
うむ

★そつけな(そんな)



郵便配達員が
やめたあとの
次の者を選ぶ法は
この郵便ヒモを
最初に越えた者
とは……
おっ
来た
パンツとヒデヨシと
テンプラだ
なにやってんのサ
郵便
じじい
うわっバカヤロ
こっちに来るな
たのむっ
来ないでくれえ
んなもん
断固
行くべしだあ
ポコ
ポコ
トト



あーっ
地獄じゃ
ええ
ヒデヨシ君が
郵便配達員
でも
字 読めないのに
どうやって
配るんだろう
根性よっ
根性で配るのよーっ
こりゃ当分
誤配の山だな


しかし
ヒデヨシが
字読めなくて
良かったかも
知れないよ
確かに……
どうして
ですかっ
ヒデ丸 よーく
考えてごらん
…もし読めたら…
あっ
手紙開いて
読んじゃうわ
字なんか
どーでも
いいのよォ
配りまくるのよォ
アタゴオル郵便局
なにーーっ
住所を
読んでくれたと
いいか
これは
耳長沼の東
32尾っぽの
霧穂さん
ああ
あそこの
雷々魚の煮つけ
んまいぜ



次は そこから北に 720尾っぽ
ああ紅ヒゲんとこか あすこは星イモ汁んまいぞ
ようは 雷々魚 星イモ 笹団子 鯨汁 冷やしサバと 配ればいいんだな
ああ
おまえ ひょっとして…
アタゴオルで
オレにおそわれない 台所はないのよ
笹団子っ それ笹団子
ドス
ドスッ
お次は
鯨汁



おーい
がんばれよー
おーーっ
鯨汁ーーっ
なに
言ってんだ
アイツ
よし
ゴツ
鯨の次は……
冷やしサバか
んっ
まだ
こんなにあるゾ
ピッ
配達



終わりーーっ
バーッ
では
昼休み
ぐーっ
おお
ご苦労さん
みーーんな
配ってきたわよっ


その調子で明日もたのむよ
これ本日の駄賃
らっ
おっホッホッホ
手紙ぶちまいてお金もらえるなんて
郵便屋って最高だわ
バレるまでブンブンまいちゃうべっ
5日後
ゆっ
ゆうびんなのよ〜〜〜っ
と…


でっかい声を出しといて……
まったく もう
「字」なんか書かないで
言いたいことあったら
直接言え〜〜っ
ザッ
……それで
ヒゲ岩の謎は解けたんですか？
いや


ヒゲは髭だと思うんだけど
…サッパリ…
謎と言えば
ヒデヨシが郵便配り続けてるのも不思議だよな
私
ヒデヨシ君が配達に来るのが見たくてね
私あてに 手紙を出したのだよ
へえっ
それで来たんですか?
それがあのドスドスする足音がないのに
いつの間にか郵便箱に入っていたんだ
妙な話だな
翌日
えーみな様
大切なお便りを


この[illegible]テコシ
必ず配りまくります
キョロ
キョロ
どりゃ
あっ、
やっぱり
最低
ばらまかり
ぶんまいて
ズラかって
行きますよ
し〜ん
うっ


子狸だ
タッ
ぐーっ
起きろよ
サボリ
郵便屋
あの子狸が
配っていたのか
なに……
あの子狸が手紙
配っていただとォ



おまえ 毎日
ぶちまいて
いただろう
それでも
バレなかったのは
あの子狸たちが
配っていたから
だよ
そうか……
そーだったのか
オレが夜中
腹づつみ打っても
アイツら来なく
なったのは
一晩中
あちこち
配ってたのか……
……
……
翌日
なにっ
本当か
本当よ


イエ〜〜ッ
う
あっ
おまえ
なんのマネだ
3区域分なのよっ
さーーっ
子狸ちゃーん
出て
らっしゃあい
つくづく
最低な奴
だな
オホホ
ホホッ
子ダヌキには
最高の奴なのさ
子狸ちゃん
さーさー
お仕事よっ
ガサ
ガサ


ら
プル
プル
どこへ行くのよ〜〜〜っ
あれっ
ヒゲ岩のまわりで……
ポンポ
ンポポンポ
なにやってんだろコイツら
腹づつみなんか打っちゃってサ
ポッ
ポポン



でも「ンポポンポッ」なんて
けっこうむずかしい拍子打ってるわよ
うっ
プク
プク
ニュ――ッ
ギョッ
プク
あらら
プク
ヒゲって
これだったのか
5日後
なんでも乗せます配ります〜〜っ
ポンポポン
こちらはー


ポンポコ便
元気よ〜〜〜っ
ポン
ポコ
ポッ
ポン
元気便なのよ〜〜〜っ
ポンポコ便で
手紙をもらった者には
それはなにげなく
まったりすると
あーっ
さっぱり
だなあ


打ってしまう
腹づつみ
ポコ
ポン

第7話 ワクワクの源




ホホホホ
すばらしい
この辺の湧水は元気がありますなあ
毘離毘離森の泉のせいだと言われてるんだが
あの森ですな
さすがのヒデヨシ君も近づけないという……
でも あの森の奥にある泉の水飲んでみたいよなあ
「湧水の王」か

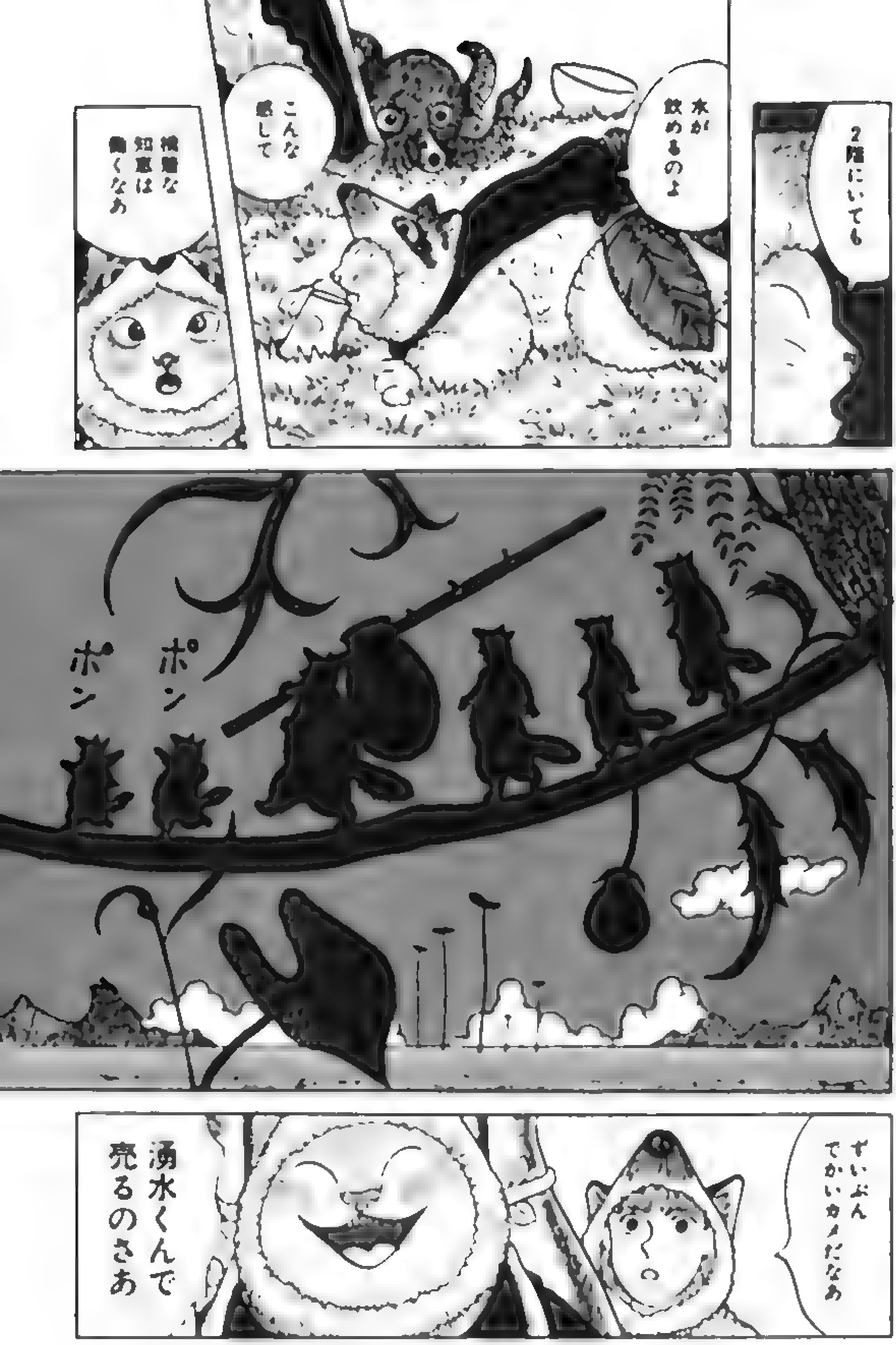

湧水の王様……いったいどんな味がするんだろう
ポーン
んっ
腹づつみ一家か……
ポン
ポコ
おーー諸君
ポン
あれっ子狸もおそろいのマント
ツキミ姫が作ってくれたんだ刺繍つきよ
「ジラベ」と「ボンベ」?
オレがつけた名前だよ
うーっのど渇いたわ
ガブ
ガブ
あ


ジラベにボンベ
その森に入っちゃ
ダメだっ
なぬっ
コラ
入るんじゃなーーい
ポン
ポコ
もどって
ビリ
ビビッ
ぐわっ
ヒデヨシ
うーー


どういうことだ
子狸にはビリビリ光線が起こらないぞ
なんと
そーいうことだったのか～～っ
あ
いったいどうしたの？
毘離毘離森に入っていくのさ
狸なら入れるんだよ
ええっ
そして伝説の泉の湧水を飲むのさ



湧水の王……
「小声の泉」という
やつね
よし
私も
行くぞ
こうなると
アタゴオル楽器
博物館から
小声笛を借りな
くてはな
それなら
オレの家にあるぜ
えっ
勝手に
盗んできて……
貴重な笛を
なんで
水ガメなんかに
つっこんで
いるんだよ?
それは
ですなあ


2階にいても
水が飲めるのよ
こんな楽して
横着な知恵は働くなあ
ポン
ポン
ずいぶんでかいカノだなあ
湧水くんで売るのさあ


小声の泉の
水なら
売れるだろう
な
どんな味なのかなあ
楽しみだな
そーだよな
でもさ
どうして「小声の泉」って
言うのかな
その水飲むと
声が小さく
なるんじゃ
ないの
君!!
しこたま
飲みなさい
「湧水博物誌」によると
「泉に近づく者
大声で話せば
恐ろし 恐ろし」
ようは
大声出すなって
ことだよ
ヒデヨシ
オレは
ゆーこと
キカン猫


おいっ毘離毘離森の
小声の泉ーーっ
みーーんなオレが
くんでやるぜえ
忠告は
完全に
逆効果
でした
まったく
いよいよ
ビリビリ地帯
だな
ツキミ姫
着ぐるみ
着ただけじゃ
ビリッとくる
からよっ
ジラベと
ボンベに
合わせて
腹づつみ
打つのよ
ホッホッホ
私
ゆーこと
キカン人
ギヨッ
へへ
じょーだん
だよ


ガチ
バチ
バチ
ポン
ポン
ポン
この森…すごい気配だ
なんだかだんだん
本当の狸になっていくみたいだな
ポン
ああ
でもこうしてみるとヒデヨシって猫でも狸でもないな
ポン
じゃあなんなのよ
ポン
バケモノ


バケモノけっこー
ポン
しかし ジラベもボンベも
ヒデヨシになついてるなあ
親だと思ってんのかな
たぶん ヒデヨシ君の腹づつみの音に感動しているんだよ
そんじょそこらの猫の腹では出ないからなあんな音
ポン
ポ
おっ



なんだ
こりゃあ?
これが
小声の泉か
なぬ〜〜〜っ
カンペキに
枯れてるぞお
おまえ オレの話
全然聞いて
ないんだなあ
なんのために
重たい笛持って
来たのかな?
らっ
博物誌には
次のようにある
「低音から
高音へと
くりかえす」
んなの
楽勝だべ
よお


ピーッ
ピーッ
ピーッ
ぷへっ
なんだよ その音
そんなに力入れなくていいんだよ
スオーッとね
よし
もう一度
ピーッ
ピーッ
ピーッ
ぷきっ
ヒデヨシ〜〜〜


らっ
ジラベなに？
その態度
ポン
ポン
代われってか？
子狸の方が
マシかもな
ピーッ
相当ふてくされてる
つんつん
うまいぞ
ジラベ
ますます
ふてくされてる
うー



※ねっちょ／アタゴオル豆猫族語で「しつこい」という意味


龍の湧水……


すんげえ
龍が
ヨダレ水
流してるぞ
ヒデヨシ君
静かに！
おーーっ
いいところに来た
こら龍
これに
たっぷり
ヨダレ水
入れろう
ぐわ


まったく……
龍への尊厳も
恐れもないんだから
うるさいから
そのままにしておこう
ふう
冷たくて
うまい……
ああ
胸がキーンと
する
起きろヒデヨシ
帰るぞ
んっ
龍!!
龍は
どこだっ
もう
消えたよ
ホホホッ
龍はにげるし
チャプ
チャプ
小声の泉の
水なんてよォ


らっ
らら
どうした
ヒデヨシ
声が出なく
なったみたいだぞ
あの龍の力
じゃないか
バカでかい声
出してるからだよ
2日後
さーさー
伝説の
湧水が
一杯
たったの
3銅貨
フーム
これが
小声の泉の
味かあ……
どうした
ヒデヨシ
やけに
静かだな
小声の泉で
大声出して
龍にやられた
らしいです


オーイ
売れてるかーーっ
すごいですよ
みんな飲んでいきます
ゴロロロロ
ん
こりゃあ
降るかな
う
……これは
……たぶん
小声の泉の
水を飲んだ
せいじゃないか
ゴロ
雷って


ジャカッ
空の龍なんだ
おお すげえ


あっ
ヒデヨシ君
声がもどった
シャカ
おっ
うっ
バチ
バチ
シャカ
こりゃっ
気ん持ち
え〜〜〜っ
そうか
……
気持ちよく
なるって……
遠い昔に
もどって
いくこと
なんだなあ
ああ……
オレたちが
熱でいっぱいの



アタゴオルは猫の森 1　おわり

ますむら・ひろし先生の最新情報はホームページ

「ごろなお通信」

をご覧ください。

イベントや新刊の情報、ファンと先生の

交流の場となる掲示板など、楽しみいっぱいです。

http://homepage1.nifty.com/goronao/



アタゴオル余波

ますむら・ひろし

故郷の山形県米沢市で原画展を開かないか、という企画を引き受けた時、同時に描き下ろしでポスターを作ることにした。さて、いったいどんな図案にすればいいのかと、想いめぐらす瞬間は、想像の城を遠くさまよっていく楽しいひとときなのだが、僕の脳裏には即ピキーンと一枚の画像が浮かんだ。

それは、二十一歳の僕が、小石川の三畳間の部屋で月刊誌「ガロ」に描いた「再会」の、斜平山から降りてきたヒデヨシの姿。なんとも素直な、そして歌っている唄といえば、ジョンのではなくポールの作った「長く、捻れた路」。

でも、何故ヒデヨシは「長く、捻れた路」を歌ってきたのだろうか?あの頃は「なんとなく、気に入ってる」くらいにしか思わなかったのだが、今の僕にはその理由がわかる。あの歌は、切ない歌だ。「かつて一緒だった者との離別、その愛した者の住む家への路が、今や、長く、そして捻れている」風景。

東京・小石川へ出てくる二年前、高校卒業の三月末、僕は上京の列車に、特急や急行を避け、あえて「鈍行の夜汽車」を選んだ。その冬、僕の家は膨らんだ借金を清算することになり、三月いっぱいで住む家を売り渡すことになっていて、僕が上りの列車に乗った瞬間、それは懐かしき家の喪失を意味していた。

斜平山を降りるヒデヨシが涼しそうに、高らかに歌った「りーみつーよどー」。あの「貴方のドアに私を導いて」という「ユア・ドア」とは、米沢市割出町の我が家のガラス戸のことだったのだと、今の僕にはわかる。

ポスターのB全ケントボードに、再会のヒデヨシを描き、そのうしろに親愛なる斜平山を描き、それから意識が爆発したような巨大なテンプラとヒデヨシを、西の夜空から帰還させた時、あの上京の夜汽車に座っていた僕のかけらは、テンプラの中で万感の形をとり、星は降りすぎるくらい降り、そのショルダーには、我が遺伝子の友之助爺さんの商標「マル友」が印されていた。

なにげない風景を輝かせるものは、その人が抱えた想いの厚みなのだ。だからこそ、故郷の山は、すべての人に囁き声を上げるのだ。

さて、一度描いたものに、付け加える言葉などないのだが、宮沢賢治が自分の詩を「心像スケッチ」と呼んだように、僕の場合でも、その時期その時期の出来事や感じたものが、作品化されているというお話の裏口から少々。

『月ヲ祭』。僕の住んでいる野田市は、東京に行くには不便なところで、当然のようにおかしな奴同士が顔を合わせることになる。劇団が芝居のために市の土地に建てたテントは、いつのまにか占拠し続け、そのテントを借りて年に二回、春と秋にコンサートをしてきた。秋にやるのを「月まつり」と僕が名づけ、延々二十四年もやってきたが、ついに九九年の秋でテント解体となった。この最後の月まつりに合わせて、描かれたこの作品、まさに消えても登り続ける胸の海の月。一夜のために僕は「月の下で」という歌を作ったが、この夜のため、宿までとって遠路から来た人たちの束の間も、また旅の宴。

「つ・き・ま・つ・り」と描いた場面、やはりここは、見開き



だったなーと懐古する。
『雪歩の引き出し』。年の瀬になると、一年全体を振り返ったりする気持ちになるのだが、大抵は年末進行で締切りが繰り上がり、それどころではない。人は大人になるにつれ、いろんな役割が増え、悩みや胸の重みが増えていくわけだが、そうした意識がスパンと消えた瞬間、世界は始まりのように見えるはずだ。何のことはない。一年一年と、感受性という奴が磨耗していくことが、成長などという言葉でくくられているだけなのだと気づく頃には、立派な名刺の大きさを持て余して、時は砂のように走り出してしまう。
　雪歩の引き出し、あれはたぶん、幼子の瞳のなかにあるんだ。
『冬をこの手に』。雪のなかに入りこむと、子供時代の楽しい想い出と同時に寒行の叩く「どんつくどんどんつく」という太鼓の音が聞こえる。寒怒呂というものには、冬の寒さの向こうの気配がちらつくが、ギルバルスが空中で交差してしまう場面に浮かんできたのは、白土三平様の有名な剣法であります。最後の見開きに雪の大海原のイメージがきたのは、言わずと知れた画狂老人。



『キホ』。ヒデヨシが白いスーツを着て、葉巻くわえている姿。ふふふふ。ひさしぶりに僕は、熱病のようにハマってしまったのが、映画「ブエナビスタ・ソシアル・クラブ」。そこのコンパイ・セグンド翁のいなせな姿に痺れました。よって毎日、ライ・クーダーのこのCDは部屋に流れ、気持ちがハバナに飛んでいた時期の作品。



春が近づく気配が、好きだ。あの暖かくなった春の晩の、ほよーんとした静けさなどたまらなくいい。春の気配は見えないが、太古の人々は現代人よりも、もっと感じ、そして、見た者すらいたと思う。かつて我が家が林のなかにあった頃の、五月あたりの木の葉の芽吹きは凄かった。隣の家との間に生えている雑木林の木々から、緑の点描のように、一日一日と緑の点は増え、やがて緑しかなくなってしまう。

ああした時間の、早送り状態を想像してみた。

『夕暮れの切手』。僕の小学校時代、切手収集のブームがあったが、当然予算のない子供には、高価な切手は宝物のように見えた。まもなく「アハーデイズナイト」をラジオで聞いた僕は、切手よりも赤いレコードを買うことに夢中になったのだったが、ニューオリンズの巨匠ドクター・ジョン様をイメージした星街の切手収集家がひさしぶりに登場する。このラスト間際の見開き。これはこれでいいのだが、今となって見てみると、この画面がそのままドラマにならず終わったのは惜しい。



そしてラストシーンの言葉。「夕暮れが、胸にしみるのは、このせいだったのか。でも、誰からの通信なんだろう」。
僕の仕事場は二階にあり、階段を登ると右の窓から、ちょうど夕日が江戸川の彼方に沈むのが見える。ときどき、おおっとため息が出るようなミカン色の見事な夕焼けや、真っ赤な黄金の苹果になっていると、窓に立ち見惚れてしまう。そして冥界に逝った岡田光男（光っちゃん）のことを思い出す。あの人は夕日の似合う男だった。そして夕焼けの歌もずいぶん唄ったせいなのか、僕はあの苹果の向こう側に光っちゃんの気配を感じ、そして思う。「いつも胸のなかに住んでるってことは、生きていることなんだよ」
『みすたあぽすとまん』。宮沢賢治の「洞熊学校を卒業した三人」のなかに、狸が出てくるが、この作品を漫画化した時、あまりに残酷な狸なのに、僕には大好きなフットボールの選手フリスト・ストイチコフが狸に似ているせいもあって、残酷な狸にモワンと愛情がわいてくるのだった。そんなこともあり、前号で狸の着ぐるみを描いたせいもあり、子狸の登場となった。途中ヒデヨシが久しぶりに一曲唄ってるが、もちろんビートルズではなく、スペイン語。





「ワクワクの源」。表紙があまりに悲しい。ヒデヨシが持ってる葉っぱに描かれた紋章は、スペインのフットボール・チーム「FCバルセロナ」のもの。ひいきのこのチームがヨーロッパのチャンピオンズ・リーグの準々決勝を突破した瞬間、決勝戦ツアーに応募し意気揚揚と原稿描いてる途中、準決勝でバレンシアに負けてしまい、へろへろほろろ状態になってしまった。



雷なんぞは、最近は家のなかからしか見ないが、子供の頃は、ずいぶん外で、でっくわしたものだ。夏ともなると、ざっこ(魚)釣りの帰りやプールの帰りのにわか雨の中、あの黒っぽい灰色の空をシャカカカと走る光の葉脈。松川橋で見た雷の美しさは、今も覚えているが、古代の人はあそこに龍の気配を感じたのだろう。

この作品でも、僕は同じことを言ってる。でもやはり、何度でも言うしかないのだ。

「いつまでも思い出そう。公園の砂場こそ、想像力の故郷」

(初出) コミックフラッパー 1999年12月号～2000年7月号

MFコミックス
フラッパーシリーズ

MFコミックス
アタゴオルは猫の森……………1

2000年12月1日 初版第1刷発行

著者……………ますむら・ひろし

発行人……………松岡博治

発行所……………株式会社メディアファクトリー
〒104-0061 東京都中央区銀座8-4-17
TEL 0570-002-001 03-5469-4760(編集)

印刷·製本…………大日本印刷株式会社

ISBN4-88991-765-9 C9979